波豆川の竜女と源満仲（波豆川）

木器から大坂峠を越えたところにある波豆川の里では、竜女が里を守ってくれると伝えられています。

波豆川の里は、摂津多田源氏の頭領源満仲の所領でありました。満仲は武勇にすぐれていて、その名が広く知られていました。領内のまつりごとにも熱心で、家来を連れてよく村々を見回っていたということです。

あるとき満仲は、村を見回り、波豆川で狩りをすることにしました。

家来たちが二手に分かれ、太鼓や鐘をにぎやかに鳴らしながら獲物を追いこんでいきます。そこを満仲や重臣たちが弓矢でねらいます。多く射止めた者が武士の誉れとしてたたえられました。満仲たちは熱中し、競い合っているうちに日暮れになりました。

「獲物がよく捕れたなあ。」

「さようでございます。」

「よし、今晩はここで野宿をすることにしよう。」

さっそく獲物を火にあぶってかぶりつき、差し入れのにぎりめしをほうばりました。見張りをおいて、火の周りで満仲たちは眠りについたのでした。

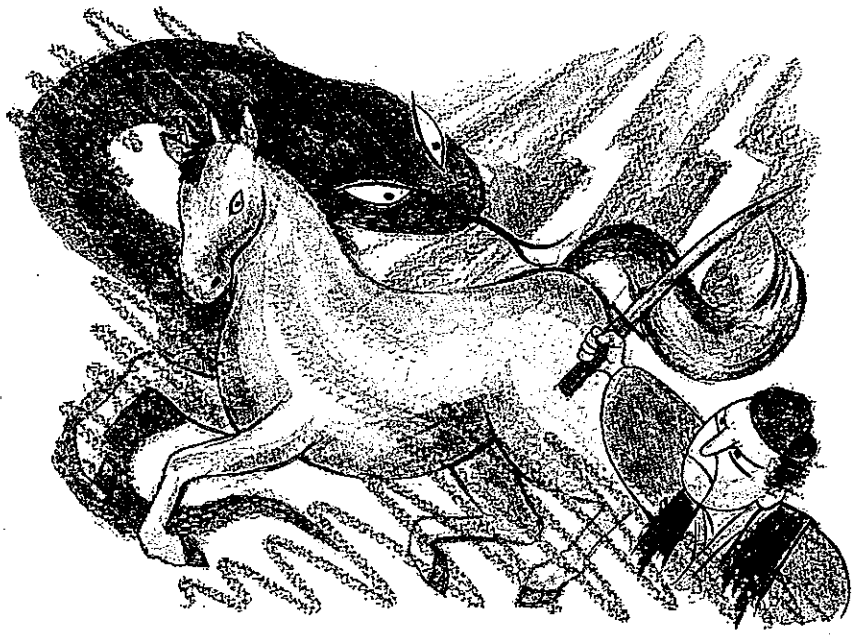
その夜、満仲はふしぎな夢を見ました。ねている枕元に竜女があらわれたのです。

「満仲様は、武勇の誉れ高いお方と見込んでお願いに参りました。その先の淵に大蛇がいて、子どもたちをのみこんだり、大人でもおそったりしているのです。里人たちは恐れおののき、外へ出ることもままなりません。里人は、これを竜女の仕業かと疑っております。どうか大蛇を退治してくださいませ。お礼に私の竜馬を進ぜましょう。」

満仲は目を覚まし、あたりを見回したところ、向こうから馬がやってくるではありませんか。満仲は夢かと目をこすりました。よく見ると、角が二本あります。竜馬です。銀色のたてがみと長い尾をなびかせて、それはそれは立派な姿でした。試しにまたがってみると、飛ぶような速さで駆け出し、右へ左へ自在に動くのでした。

あっけにとられている家来たちに、満仲は夢の中に出てきた竜女のことを語って聞かせました。

「それは見捨てておけませんな。」



「殿、さっそく大蛇を退治いたしましょう。」

さっそく作戦を練りました。おとりの獲物を淵に近いところにぶら下げ、大蛇を待つことにしました。

しばらくすると、大蛇がぬらりとやってきました。獲物に食らいつこうと鎌首を持ち上げました。その時、太鼓を合図に家来たちが一斉に矢を放ちました。不意をつかれた大蛇は鎌首をいったん落としかけましたが、また大きく目を見開き、赤い舌をべろべろさせて立ち向かってきました。

そこへ竜馬に乗った満仲が宙を飛び、脳天に太刀を打ち下ろしました。

「ぐおーっ。」

大きな鎌首がくずれ落ちました。こうして大蛇は退治されました。

里人たちは大そう喜びました。竜女の仕業でなかったことも分かりました。満仲に感謝し、一行がすっかり見えなくなるまで見送りました。

大蛇退治の話が広く伝わり、満仲はいっそう有名になりました。そして、源氏を名乗る人たちの心のよりどころになったということです。

それからというもの、満仲は片時も竜馬を離すことはありませんでした。

満仲は年を取り、やがてこの世を去りました。家来たちは相談し、竜馬を竜女に返すことにしました。

ところが竜馬はあてもなくさまよったのでしょう。山の中で倒れてしまいました。家来たちは哀れに思い、その山の見晴らしのよいところに葬ってやりました。